

イチロー選手の秘密とは
—ボール痕(こん)を研究—

開倫塾
塾長 林 明夫

おはようございます。開倫塾塾長の林明夫です。今朝も「開倫塾の時間」をお聴きいただき、ありがとうございます。

今日は、ゲストをお招きしてお話を伺います。オーエム通商アクト株式会社の代表取締役社長の廣瀬駒雄さんです。廣瀬さんとは東京の公益社団法人経済同友会で同じ会員として様々な委員会でご一緒させていただいております。特に、学校と企業連携推進委員会で行っている経営者を学校に無料で派遣するプログラムでは、年に何回もご一緒させていただいています。

また、キワニスクラブは、米国ではロータリークラブ、ライオンズクラブとともに3大奉仕団体として知られていますが、その中の東京キワニスクラブにも廣瀬さんのご紹介で入会させていただいております。廣瀬さんは、私にとって尊敬する親しい友人であります。

廣瀬さん、今日はよろしく願いいたします。

廣瀬：はい、わかりました。

林：廣瀬さんは、現在はオーエム通商アクトの代表取締役社長さんですが、以前はオリックスという会社の専務をなさっていらっしゃいました。その当時、皆さんもよくご存知の大リーグ野球選手でご活躍のイチローさんと非常に深いお付き合いがあったということですので、今日は廣瀬駒雄さんからイチローさんのお話を聞かせていただけると有難いです。

なぜイチローさんはあそこまで素晴らしい野球選手になったのでしょうか。まず、その秘密を教えてくださいませんか。

廣瀬：オリックスという球団がドラフト会議で彼を指名し、そして入ってきた年が1990年です。そのとき、私はたまたまオリックスという会社の財務の責任者をやっておりました。その関係で、球団を買うとか、そのためにはお金がいくらかかるのかといったことで、財務の責任者である私に相談がありました。そのため、球団の取得から選手のドラフト会議に至るまでの経緯をわりあいによく見ていたのです。そのようなこともあり、私は、現在のイチローのお話を学校での出張授業の中でわりあいに大々的に使っています。

彼は、毎年秋に行われる12球団のドラフト会議の中でドラ1ではありませんでした。ドラ1とは、各球団がドラフト会議の中で1番目に指名する選手のことですが、彼はオリックスに入団するときの1990年のドラフト会議ではドラ1ではなく、ドラ4だったのです。現在は70名にな

っていますが、その当時の普通の球団は支配下選手が 60 名でした。ですから、ドラフト会議で 6 名指名しますと、現有勢力 60 名の 1 割を罷めさせなくてはなりません。そのため、ドラ 6 とかドラ 7 とかはどのチームも指名しないのです。そうすると、ドラ 4 やドラ 5 とは、おそらく各チームが指名するぎりぎりの線ということです。つまり、イチローはプロ野球選手としてオリックスに入ってくるときに、私から見ればピカピカではなかったのです。これが、私の印象です。

林：そうだったのですか。そのイチロー選手がピカピカになったのはなぜでしょうか。

廣瀬：これは、さらに言い得て妙なのですが、その当時ブルーウェーブという球団名であった現在のオリックス球団に、土井さんという監督が監督として招聘されました。その土井監督が「あの振り子打法というのは非常に重心の安定しない打法なので、監督としては、イチローがフォームを変えないかぎり 1 軍では使わない」と言い切ってしまいました。そのため、土井監督が監督をしている間は、イチローはずっと 2 軍生活でした。

1 軍の選手は、先ほどお話した 60 名の支配下選手の中の 24 名です。この 24 名しかダッグアウトには入れません。そして、24 名以下が 2 軍という形での野球選手生活を送ります。イチローは、土井監督が監督を務めた 3 年間はすべて 2 軍生活をしていました。

イチローが晴れて 1 軍に入ったのは、土井監督から仰木という監督に替わった年です。それは、1994 年でした。その年に、2 軍生活を 3 年間送ったイチローが、日本人選手としては初めて年間 200 本安打を記録したのです。

林：1 軍になった最初の年からですか。

廣瀬：はい。よって、ドラ 4 で入ってきたピカピカではないイチローは、2 軍生活を 3 年間送る中で、試合にこそ出なかったものの、毎日練習に明け暮れていたのだと思います。2 軍戦はありますが、毎日の練習の中で努力を重ね、その努力の結果を新しい仰木監督のもとで 1 軍に採用されたときに晴れて出したのだらうと思っています。

林：そうですね。なぜそこで才能が開花したのでしょうか。

廣瀬：イチローから直接聞いたことではありませんが、私の見ているすべてをお話します。

私は、仕事の許す限り野球の試合を見ることにしていました。イチローの出た試合はかなりの数を見えています。選手は、試合が終わるとダッグアウトからロッカールームへ移動し、ロッカールームで用具を片付けるとスタジアムの裏に来ている各々の球団名の入ったバスに乗り込みます。そして、そのバスはホテルに向かいます。

いつも、イチローはそのバスに乗る最後の選手です。毎回、イチローが最後なのです。なぜイチローは毎回もたもたしているのだらう、おかしいなと思ってロッカールームの中で見ていたところ、イチローはバットについてボール痕を 1 球 1 球思い出しながら、第 1 打席目の何球目がここに当たり、そのときの腰の開きは早かったとか遅かったとかを確認しながらバットを拭いているように見受けられました。

林 : ボール痕とは何ですか。

廣瀬 : ボールの当たった痕です。選手は当たった痕を拭くのですが、イチローは考えながら拭いているので時間がかかっていると私は見抜いたのです。これは、碁の名人や将棋の名人がよくやることで、局面が終わると盤面に初手からもう一度並べて、何手目で失敗したかを確認します。そして、これで負けたのだということがわかると、以後はその手を2度と打たないのです。

まさかとは思いますが、そのような名人がやっていることを、イチローはバットのボール痕を拭いながらやっているように見えたのです。私は、これもイチローの努力の証と見ています。イチローが今日あるのは、すべて自分の失敗から学んでいるからだと思います。

野球選手は7割が失敗です。3割成功すれば一流選手なのです。その7割の失敗からすべてを毎試合ごとに学んでいるところが、イチローが一流になっている中身であると思います。

林 : ありがとうございます。今日は短い時間ではありましたが、オリックスの元専務さんでいらっしゃる廣瀬駒雄さんから、イチロー選手に直に接して見えたこと、なぜイチロー選手は素晴らしい選手になったのかというお話や失敗から学ぶというお話をお伺いしました。

廣瀬さん、どうもありがとうございました。

廣瀬 : どうもありがとうございました。

林 : 今日のお話は、放送をお聴きの皆さんも参考になったことと思います。

— 2013年2月23日追記・改訂 林明夫 —